

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

民法修正案参考書

(発行年 / Year)

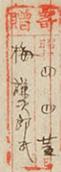
1910

20280



民法修正案參考書

法典調查會



第三節 戸主權ノ喪失

(理由) 戸主權ノ一家庭組織ノ至重ノ要素ニシ

テ戸主ニ屬スル公私ノ權利義務ハ即チ戸

主權ノ得喪ニ因リテ發生又ハ消滅スルモ

ノナレハ戸主權ノ得喪ハ極メテ之ヲ明確

ナラシムルコトヲ要ス然レトモ一家ヲ創

法典調査會

立シ又ハ公家ヲ為スコトニ因リテ戸主權

ヲ取得スルカ如キハ別ニ法律ノ規定ヲ要

セス又家督相續ニ因リテ戸主權ヲ取得ス

ルコトハ相續編ノ規定ニ依リテ明白ナル

ハ戸主權ノ取得ニ関シ殊更ニ本章ニ於テ

規定ヲ設クル必要アルコトナシ之ニ及シ

戸主權ノ喪失ニ付テハ其原因種々ニシテ
法律ノ明文ニ依リ特ニ之ヲ規定スルコト
ヲ要スル事項決シテ少カラス而シテ死亡、
失踪、入夫、戸主ノ離婚ノ如キハ総テ戸主權
喪失ノ原因タルベシト雖モ此等ハ別ニ明
文ヲ以テ之ヲ規定スル必要ナキニ及シ戸
主カ隱居ヲ爲シ又ハ一家ヲ廢絶セシムル
コトニ因リテ戸主權ヲ喪失スル場合ノ如
キハ他ニ之ヲ規定スヘキ適當ノ場所ナキ
ヲ以テ本章ニ於テ豫メ其規定ヲ設ケ隨意
ニ戸主權ヲ拋棄シテ濫リニ公私ノ利益ヲ
害スルコト勿カラシムルコトヲ要ス是レ

即チ本案ハ既成法典ニ其例ナキニ拘ハラ
ス本節ノ規定ヲ設ケ戶主權喪失ノ原因ト
シテ殊ニ規定ヲ要スルモノヲ掲クル所以
ニシテ就中隱居ニ関スル規定ハ既成法典
ニ於テハ之ヲ財產取得編ニ掲ケ單ニ財產
相續ノ原因ト認ムルカ如シト雖モ隱居ハ

法典編查會

即チ戶主權喪失ノ直接原因ニシテ之ニ因
リテ相續問題ヲ生セシムルモノナレハ本
案ハ戶主權ノ喪失ニ関スル本節ニ於テ隱
居ニ関スル規定ヲ掲ケ其相續ニ関スル所
ハ之ヲ相續編ニ掲クルコトト爲セリ

第七百五十二條 戸主ハ左ニ掲ケタル條件ノ
具備スルニ非サレハ隱居ヲ為スコトヲ得ズ
一 滿六十年以上ナルコト

ニ 完全ノ能力ヲ有スル家督相續人カ相
續ノ單純承認ヲ為スコト

(參照) 取三〇六 庚午閏十月十七日告、六年一
月二十二日布二八號、七年三月三十日福岡
縣伺、八年七月十日内務省伺、同年九月十二
日熊谷縣伺、同年十一月二十七日正院決裁、
同年同月二十八日岡山縣伺、九年三月二十
四日福島縣伺、同年四月二十七日廣島縣伺、
十三年一月二十七日大分縣伺、二十一年十
一月十六日新潟縣伺

法典調査會

(理由) 本條乃至第七百六十條ハ隱居ニ関ス

ル規定ニシテ就中本條ハ既成法典財産取
得編第三百六條ニ修正ヲ加ヘ隱居ヲ為ス

ニ必要ナル法律上ノ條件ヲ指定セリ蓋シ
一家ノ戸主タル者カ自己ノ安逸ヲ計リテ

隨意ニ戸主權ヲ讓リ或少壯有為ノ戸主カ

隨意ニ隱居ヲ為シテ其力ヲ公私ノ利益ニ
盡ササルカ如キハ家族制度ノ本旨ヨリ推
スモ亦一般經濟上ノ利益ヨリ見ルモ決シ
テ看過スヘキモノニ非ス又戸主カ隱居ヲ
為ス以上ハ戸主タレ身公ニ於テ負擔スル
義務ハ總テ之ヲ免ルルコトヲ得ヘキモノ
ナレハ苟モ戸主カ隨意ニ隱居ヲ為スコト
ヲ得ルニ於テハ之カ為メニ債權者ニ不慮
ノ損害ヲ被ラシケルコト決シテ少シトセ
ス故ニ隱居ハ法律上之ヲ認めサルヲ以テ
至當ト為ストノ立法論ナキニ非スト雖モ
我國ニ於テハ夙ニ隱居ノ風習公行シ一朝

之ヲ禁止スルハ頗ル母當ナラサルノミナ
ラス實際上戸主タル位置ニ堪ヘサル理由
アル者ヲシテ強ヒテ戸主タラシムルハ其
當ヲ得サルニ因リ本案ハ既成法典ノ如ク
法律上隱居ヲ為スコトヲ公認スト雖モ豫
メ其要件ヲ指定シテ適當ノ制限ヲ加ヘ隱
居ノ制度ニ因リテ生スル種々ノ弊害ヲ豫
防センコトヲ期セリ

法典調査會

左ニ隱居ヲ為スニ必要ナル條件ニ関シ既
成法典ニ修正ヲ加ヘタル諸點ヲ説明セシ
ニ壯年ノ戸主ヲシテ濫リニ隱居ヲ為サシ
ムルノ不得策ニシテ且不必要ナルコト

ハ言フ 竝々サル 所タルニ 因リ 相當ノ 老
年ニ 達スルニ 非サレハ 隱居ヲ 為スコト
ヲ 得サラシムルハ 固ヨリ 至當ノ 制限タ
ルヘシ 而シテ 此年齡ニ 付テハ 或ハ 七十
歳トシ 或ハ 五十歳ト 為ス先例アリト 雖
モ 一般ニ 我國人民ノ 心身 衰耗ノ 狀況ニ
徴スル トキハ 既成法典ノ 如ク 滿六十歳
ヲ以テ 隱居年齡ト 為スコト 其當ヲ 得タ
ルモノト 認ムルニ 因リ 本案ハ 即チ 此例
ニ 從フト 雖モ 既成法典ノ 如ク 隱居ヲ以
テ 本人ノ 任意ニ 出ヅルコトヲ 要スル旨
ヲ 明示スルハ 言フヲ 要セサル 所タルニ

因リ本案ハ別ニ此要件ヲ掲ケスニテ却
テ隱居ノ取消ヲ規定スルニ當リ本人ノ
任意ニ出テサル隱居ハ之ヲ取消スコト
ヲ得ヘキ旨ヲ認メ之ニ依リテ立法上ノ
軀裁ト實際ノ必要ニ適セシメタリ

法典調査會

二、戸主タル身分ニハ特別ノ權利義務ノ伴
フモノナレハ戸主カ隱居ヲ為スニ當リ
テハ此等ノ權利義務ヲ繼承ニテ一家ノ
長タルニ堪フル者カ單純ニ家督相續ヲ
為スコトヲ要スルハ勿論ナリト雖モ既
成法典ノ如ク右ノ場合ニ於テハ實際家
政ヲ執ルノ能カル家督相續人ノ存ス

ルコトヲ必要ト為スハ相續人タル者ノ
條件頗ル嚴シ夫レ且實際家政ヲ執ルニ
堪フルヤ否ヤハ甚タ判別シ難キヲ以テ
本案ハ單ニ完全ナル能力ヲ有スル家督
相續人タルヲ以テ足レリトシ其能力者
ナルト無能力者ナルトハ能力ニ墜スル

法典調査會

總則編ノ規定ニ從ヒ之ヲ定メシムルモ
ノト為セリ其他既成法典ハ家督相續人
カ單純ノ受諾ヲ為スコトヲ要スト云フ
ニ止マルト雖モ之レ固ヨリ相續ニ墜ス
ルモノナレハ本案ハ明カニ相續ノ單純
承認ヲ為スコトヲ要ストシ單純承認ノ

何タルヤハ相續編ノ規定ニ依リテ明白

ナラシムルモノトス

三、既成法典ハ隱居ヲ為スニ付キ必ス配偶
者ノ承諾アルコトヲ要セリ之レ戸主カ

戸主權ヲ喪失スルニ付テハ其配偶者モ

亦利害關係ヲ有スルコト甚々大ナルニ

因リ頗ル安當ノ規定ナルヘシト雖モ法
律上ノ通則トシテ此條件ヲ掲クルハ其
當ヲ得タルモノニ非ス何トナレハ戸主
ニタル夫ヲシテ其妻ノ承諾アルニ非サル
バ隱居ヲ為スコトヲ得サラシムル如キ
ハ我國ノ人情風習ニ適セサルノミナラフ

ス隱居ヲ為サントスル戸主ハ必ス其配
偶者アルニ限ラサレハナリ只有夫ノ女
戸主カ隱居ヲ為スニ當リ此者ヲ以テ其
夫ノ承諾ヲ求メシムルハ至當ノ制限々
ルハキニ因リ本案ハ配偶者ノ承諾ヲ以
テ隱居ヲ為スニ必要ナル條件ノ通則ト

法典調査會

為サスシテ有夫ノ女戸主ガ隱居ヲ為ス
場合ニ於テ此條件ヲ必要ト為セリ(第七

百五十五條)

第七百五十三條 戸主カ疾病、本家ノ相續又ハ再興其他己ムコトヲ得サル事由ニ因リテ爾後家政ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ前條ノ規定ニ拘ハラズ裁判所ノ許可ヲ得テ隱居ヲ為スコトヲ得但法定ノ推定家督相續人アラサルトキハ豫メ家督相續人タルハキ者ヲ定メ其承認ヲ得ルコトヲ要ス

(参照) 取三〇七、六年五月二十日山口縣伺七
年三月三十日福岡縣伺、同年四月二十五日
濱田縣伺、同年九月二十日鳥取縣伺、八年七
月十日内務省伺、同年九月十二日熊谷縣伺、
同年十一月二十八日岡山縣伺、十四年十月
七日岩手縣伺

法典調査會

(理由) 本條ハ既成法典財産取得編第三百七
條ト同一ノ趣旨ニ基ツクト雖モ聊カ適用

ノ範圍ヲ擴張セリ抑モ法律上隱居ナルモノ
ノヲ公認スル所以ハ主トシテ實際家政ヲ
執ルコト能ハサル狀況ニ至リタル戸主
ヲシテ強ヒテ戸主タラシムルハ却テ實際

上ニ不利不便ヲ與フルニ過キサルヲ以テ
右ノ事由ノ存スル以上ハ隱居ヲ為スコト
ヲ得セシムルヲ以テ至當ト認メタルニ因
レリ故ニ本案モ亦既成法典ノ如ク戶主カ
疾病本家相續其他營業上ノ必要公務上ノ
理由ノ如キ己レコトヲ得サル事由ニ因リ

法典調査會

實際家政ヲ執ルコト能ハサル狀況ニ至
リタルトキハ隱居ヲ為スニ必要ナル條件
ヲ具備セシテ隱居ヲ為スコトヲ許スト
雖モ既成法典ノ如ク此等ノ事由ノ存スル
トキハ單ニ年齡ノ條件ヲ有怨スルコトヲ
得ルニ止ムルハ聊カ狹キニ失スルモノト

云ハサルヘカラヌ何トナレハ本家相續ノ
場合ノ如キハ完全ナル能力アル家督相續
人ナキニ拘ハラス分家ノ戸主ヲニテ本家
ヲ相續セシムル必要アルヲ以テ此ノ如キ
場合ニ於テハ單ニ年齡ノ條件ヲ宥恕スル
ニ止マラサレハナリ故ニ本家ハ本條ノ場
合ニ於テハ隱居ノ要件ニ墜スル前條ノ規
定ニ拘ハラス隱居ヲ為スコトヲ得トシ其
適用ノ範圍ヲ適當ニ擴張スト雖モ之カ為
メニ一家斷絶ノ結果ヲ生セシムルカ如キ
ハ固ヨリ之ヲ制止セサルヘカラサルニ因
リ特ニ但書ノ規定ヲ設ケテ此弊ヲカラシ

メンコトヲ期セリ

其他隱居ニ関スル事項ハ従来行政官廳ノ

管轄ニ屬セシト雖モ隱居ヲ為スコトハ本

人其他利害關係人ノ權利ニ重要ナル關係

ヲ有シ且本條ノ場合ノ如ク法定ノ要件ニ

反シテ隱居ヲ為スニ當リテハ其原因タル

法典調査會

事由ノ確實ナルコトヲ保テ濫リニ公私ノ

利益ヲ害スルコト勿カラシメサルヘカク

サルニ因リ本案ハ既成法費ノ如ク本條ノ

場合ニ於テハ裁判所ノ許可ヲ必要ト為ス

コトト定メタリト雖モ裁判所ノ管轄權限

ニ至リテハ裁判所構成法其他ノ特別法ニ

於テ之ヲ規定ニ依リテ定ムルヘキモノナ
ルヲ以テ本條ニ於テハ特ニ其管轄裁判所
ヲ指定スルノ必要ヲ觀サルナリ

第七百五十四條 戸主カ婚姻ニ因リテ他家ニ
入ラント欲スルトキハ前條ノ規定ニ從ヒ隱
居ヲ為スコトヲ得

戸主カ隱居ヲ為サシテ婚姻ニ因リ他家ニ
入ラント欲スル場合ニ於テ戸籍吏カ其届出
ヲ受理シタルトキハ其戸主ハ婚姻ノ日ニ於
テ隱居ヲ為シタルモノト看做ス

(參照) 六年一月二十二日達 二八號 同年五月
十七日東京府伺同年八月十三日告三〇一
號 同年同月十七日小倉縣伺 同年同月二十
五月京都府伺 九年五月二十日告七五號 十
年八月三十日達六〇號

法典調査會

(理由) 戸主殊ニ女戸主カ婚姻ニ因リテ他家

ニ入ラントスルコトハ實際上往々見ル所

ニシテ家ヲ重シシ戸主タル 位地ヲ忍カセ

ニスルコト勿カラシメントスル趣旨ニ拘

泥スルトキハ或ハ戸主カ婚姻ニ因リテ他

家ニ入ルコトヲモ禁セサルヘカラスト雖

モ之レ頗ル人情ニ及シ實際ノ事情ニ適セ
サルノミナラス既ニ法律上女戸主ノ存在
ヲ認ムル以上ハ此者カ婚姻ニ因リテ他家
ニ入ルコトヲ得ストモハ其結果殆ント女
戸主ヲシテ婚姻ヲ為スコト能ハサル事情
ニ陥ラシムルニ至ラン何トナルハ女戸主
カ他ニ婚嫁スルコトハ容易ナルモ入夫ヲ
迎フルコトハ實際甚タ困難ナシハナリ故
ニ男女両戸主カ互ニ婚姻ヲ為シ或ハ戸主
カ他家ノ者ト結婚シテ他家ニ入ルコトハ
之ヲ許ササルハカラスト雖モ此場合ニ於
テハ他家ニ入ラントスル者ハ自家ノ戸主

タル權利ヲ失ハサルヘカラサルハ當然ニ
シテ此事タルヤ一身一家ノ利害ニ重大ナ
ル關係ヲ有シ且隱居ノ要件ヲ具備セスシ
テ戶主權ヲ喪失スルモノナレハ濫リニ此
結果ヲ生スルコト勿カラシムルコトヲ要
ス之レ本案ハ既成法典ニ其例ナシト雖モ

法典調査會

特ニ本條ノ規定ヲ設ケ戶主カ婚姻ニ因リ
テ他家ニ入ラント欲スルトキハ恰モ前條
ノ場合ニ於ケルカ如ク隱居ノ要件ヲ具備
セサルモ裁判所ノ許可ヲ得テ隱居ヲ爲シ
然ル後他家ニ入ルヘキモノト爲ス所以ニ
シテ即チ本條ノ事由ヲ以テ隱居ヲ爲スコト

ヲ許スヘキ理由ノ一ト認ムト雖モ婚姻ハ
前條ニ所謂已ムコトヲ得サル事由中ニ包
合セサルニ因リ別ニ本條ノ明文ヲ掲クル
モノトス

戸主カ隠居ヲ為サスレテ婚姻ノ届出ヲ為
シタルトキハ戸籍吏ハ第七百七十五條ノ

法典調査會

規定ニ依リ其届出ヲ受理スルコト能ハサ
ルモノナリト雖モ誤テ一タヒ之ヲ受理ス
ルトキハ其婚姻ハ第七百七十四條ノ規定
ニ依リ有效ニ成立スルモノナリトス此場
合ニ於テハ其婚姻ヲ解除スルカ其戸主ヲ
廢スルカ二中ノ一ヲ擇ハサルハカラス婚

姻ヲ解除スルハ人情ニ及ス寧ロ家ヲ重シ
セサル戸主ノ權利ヲ失ハシムルノ優レル
ニ如カス是レ本條第二項ヲ四置キタル所以
ナリ

第七百五十五條 女戸主ハ年齡ニ拘ハラズ隱
居ヲ為スコトヲ得

有夫ノ女戸主カ隱居ヲ為スニハ其夫ノ同意
ヲ得ルコトヲ要ス但夫ハ正當ノ理由アルニ
非サレハ其同意ヲ拒ムコトヲ得ス

(參照) 取三〇六四號

(理由) 女子ト雖モ戸主タルコトヲ得ルハ法
律ノ認ムル所ナリト雖モ從來ノ慣習並ニ

一家組織ノ必要ヨリ見ルモ婦ハ其夫ニ從

法典調査會

順ナルコトヲ要シ或ハ女子ハ家督相續ノ

順位ニ於テ男子ノ後ニ立タサルハカラサ

ル立法ノ本旨ニ徴スルモ女戸主ノ衰則ニ

シテ通常男子カ戸主タルヘキハ疑ナキ所

トス故ニ女子カ一旦戸主ト為リタルモ完

全ノ能力ヲ有スル家督相續人カ相續ノ畢

純承認ヲ為ス以上ハ女戸主ノ年齡ヲ滿六
十歳ニ達セサルモ戸主權ヲ讓リテ退隱ス
ルコトヲ得セシムルハ却テ立法ノ本旨ニ
適シ實際ノ必要ニ應スルモノトス是レ本
條第一項ハ女戸主カ隱居ヲ為スニ當リテ
ハ年齡ニ關スル法定ノ要件ニ從フコトヲ
要セスト為ス所以ナリ
之ニ及シテ隱居ヲ為スニ必要ナル條件ノ
通則トシテ配偶者ノ承諾ヲ其中ニ加ヘサ
ルコトハ既ニ第七百五十二條ニ於テ說明
セシ如クナリト雖モ有夫ノ女戸主カ隱居
ヲ為スニ當リテモ右ノ通則ニ從ヒ配偶者

ノ承諾ヲ要セスト爲スニ於テハ夫婦ノ倫
序ニ悖リ一般ノ風習ニ及スルノミナラス
婦ハ其夫ニ從順ナルコトヲ要スル義務ヲ
盡ササラシムルモノナレハ本條第七項ハ
有夫ノ女戸主カ隱居ヲ爲スニハ其夫ノ承
諾ヲ要ストシ即チ第七百五十二條ニ掲ケ
タル要件以外ニ特別ノ要件ヲ加ヘタリ然
レトモ右ノ場合ニ於テ夫ハ自己ノ利益ノ
爲メニ或ハ不正ノ事由ニ基キ其承諾ヲ與
フルコトヲ拒ミ之カ爲メニ隱居ヲ爲スニ
必要ナル他ノ條件カ具備シ且實際隱居ヲ
爲スコトヲ得セシメサルヘカラサル事情

ノ存スルニ拘ハラヌ女戸主ヲシテ隱居ヲ
為スコト能ハサラシムル弊ナシトセス之
レ本條第一項但書ノ規定ヲ設クル所以ナ
リ

第七百五十六條 隱居ハ隱居者及ヒ其家督相
續人ヨリ之ヲ戶籍吏ニ届出ツルニ因リテ其
效力ヲ生ス

(参照) 取三一〇三一、八年十二月九日達二
〇九號、十七年一月十八日神奈川縣伺

(理由) 本條ハ隱居ノ效力發生ノ時期ヲ規定
スルモノニシテ既成法典財産取得編第三
百十條及ヒ第三百十一條ニ修正ヲ加ヘ又

法典調査會

ルモノナリ即チ既成法典ノ規定ニ依レハ
隱居ノ效力發生ノ時期ハ頗ル曖昧ニシテ
第三百十條ニ於テハ身分取扱吏ニ届出テ
タル時ヲ以テ效力發生ノ時期ト為スモノ
ノ如ク而シテ第三百十一條ニ於テハ右届
出前ノ利害關係人ノ之ニ對シテハ第三百

八條ニ掲ケタル故障期間満限ノ時又ハ故障ノ棄却カ確定シタル日ヲ以テ效力發生ノ時期ト為スモノナレハ其結果ハ即チ或人ニ對シテハ相續人カ戶主タルモ他ノ人ニ對シテハ隱居カ仍ホ戶主タルカ如ク實際上頗ル煩雜ナル關係ヲ生スルコトヲ免レサルヘシ故ニ隱居ノ效力發生ノ時期ハ既成法典ノ如ク之ヲ二段ニ分ツコトハ其當ヲ得サルモノニシテ寧ロ其草案ノ如ク確一ノ時期ヲ指定スルヲ以テ至當ト認ムルニ因リ本案ハ隱居者及ヒ其家督相續人ヨリ戶籍吏ニ届出テタル時ヲ以テ隱居ノ

效力ノ發生時期ト爲セリ蓋シ此主義ハ婚
姻縁組等ニ通シテ一般ニ本來ノ採用スル
所ニシテ最モ實際ノ事情ニ適スルモノト
云フヘシ

第七百五十七條 隱居者ノ親族及ヒ檢事ハ隱
居届出ノ日ヨリ三個月内ニ第七百五十二條
又ハ第七百五十三條ノ規定ニ違及シタル隱
居ノ取消ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得
女戸主カ第七百五十五條第二項ノ規定ニ違
及シテ隱居ヲ為シタルトキハ夫ハ前項ノ期
間内ニ其取消ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得
(参照)取三〇八、三〇九、一項

(理由) 既成法典財産取得編第三百八條ハ隱

居ニ付キ故障ヲ申立ツルコトヲ得ヘキ旨

法典調査會

ヲ認ムルモノニシテ立法ノ本旨ハ固ヨリ
至當ノ事ニ屬スト雖モ故障ノ效力ニ關ス
ル立法主義ハ判然タラサルカ如ク即チ一
方ニ於テハ故障ノ申立ハ隱居ノ成立ヲ妨
クルカ如クト雖モ他ノ一方ニ於テハ第三
百十條ノ規定ニ依リ故障ノ有無ニ拘ハラ

ス届出ニ因リテ隱居ハ成立スルモノノ如クナレハナリ而シテ本案ハ既ニ前條ニ於テ隱居ハ戶籍吏ニ之ヲ届出ツルニ因リテ其效力ヲ生スヘキコトヲ確定シタルヲ以テ隱居ヲ為スニ必要ナル法定ノ條件ヲ缺キタル場合ニ於テハ既ニ成立シタル隱居

法典調査會

ヲ取消スコトヲ得ヘキモノトシ取消ノ效力ハ法律行為ノ取消ニ闕スル終則編ノ通則ニ依リテ之ヲ定メシムルモノニシテ之ニ依リテ立法主義ヲ判然タラシムルト同時ニ隱居ヲ為スコトニ付キ利害關係ヲ有スル親族及ヒ女戶主ノ夫ノ利益ヲ保護シ

且公私ノ利益ヲ保護スル檢事ヲシテ右ノ
取消權ヲ行フコトヲ得セシムルモノトセ
リ

本條第一項ハ既成法典財産取得編第三百
九條第一項ノ範圍ヲ縮小シ女戸主カ其夫
ノ承諾ヲ得スシテ隱居ヲ為シタル場合ニ

法典調査會

限ルモノニシテ是レ本案ハ既ニ第七百五
十條ニ於テ説明セシ如ク一般ニ配偶者ノ
承諾ヲ以テ隱居ノ要件ノ通則ト為ササリ
シ當然ノ結果タルニ過キス

第七百五十八條

隱居者又ハ家督相續人カ詐欺又ハ強迫ニ因リテ隱居ノ届出ヲ為シタルトキハ隱居者又ハ家督相續人ハ其詐欺ヲ發見シ又ハ強迫ヲ免レタル時ヨリ一年内ニ隱居ノ取消ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得但追認ヲ為シタルトキハ此限ニ在ラス

隱居者又ハ家督相續人カ詐欺ヲ發見セス又ハ強迫ヲ免レサル間ハ其親族又ハ檢事ヨリ隱居ノ取消ヲ請求スルコトヲ得但其請求ノ後隱居者又ハ家督相續人カ追認ヲ為シタルトキハ取消權ハ之ニ因リテ消滅ス

前二項ノ取消權ハ隱居届出ノ日ヨリ十年ヲ經過シタルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

法典調査會

(參照) 取三〇八

(理由) 隱居ハ本人ノ任意ニ出ツルコトヲ要

スルハ列ニ法律ノ明文ヲ俟タサル所ニシ

テ家督相續人カ相續ノ單純承認ヲ為スコ

トヲ以テ隱居ノ要件ト為スコトハ既ニ第

七百五十二條ノ明示スル所ナレハ第七百

五十六條ハ即チ隱居カ其效カヲ生スルニ
ハ隱居者及ヒ家督相續人ヨリ隱居ノ届出
ヲ為スコトヲ必_レ要トセリ然ルニ隱居者又
ハ家督相續人カ他人ヨリ詐欺又ハ強迫ヲ
受ケ之ニ因リテ隱居ノ届出ヲ為スニ至ル
コトハ實際上往々ニシテ存スル一所ナルヲ

法典調査會

以テ斯ノ如ク本人ノ任意ニ出テサル隱居
ハ之ヲ取消スコトヲ得セシムルヲ以テ至
當トス而シテ既成_レ法典財産取得編第三
八條第二項ハ任意ニ出テサル隱居ニ付テ
ハ隱居者ニ於テ故障ヲ申立ツルコトヲ得
ヘキ旨ヲ認ムト雖モ家督相續人ニ付テ之

ヲ認メサルハ其缺點ト云ハサルヘカラサルニ因リ本案ハ家督相續人ニモ隱居ノ取消權ヲ行フコトヲ得セシメ且既成法典ノ如ク故障期間ヲ以テ僅ニ隱居届出ノ日ヨリ六十日ト為スハ短期ニ失スル弊アルニ因リ本案ハ隱居者又ハ家督相續人カ其詐欺ニ陥リタルコトヲ發見シ又ハ強迫ヲ免レタル時ヨリ一年内ニ隱居ノ取消ヲ請求スルコトヲ得ルモノト為セリ其他詐欺又ハ強迫ニ因リテ隱居ノ届出ヲ為シタルモ本人カ此隱居ヲ追認スル以上ハ強ヒテ之ヲ取消サシムヘキ必要ナキヲ以テ本案ハ

特ニ本條但書ノ規定ヲ設ケ本人カ追認ヲ
為シタルトキハ以後隱居ノ取消ヲ請求ス
ルコトヲ得サル旨ヲ明カニセリ

隱居ヲ為スコトハ公私ノ利益ニ種々ノ関
係ヲ有スルモノナレハ既成法典財産取得
編第百八條第一項ハ隱居者ノ親族及ヒ

法典調査會

檢事ニモ隱居ニ付テ故障ヲ申立ツル權利
ヲ認ムルモノニシテ本案モ亦本條第二項
ニ於テ此等ノ者ニ隱居ノ取消權ヲ與ヘタ
リ然レトモ隱居者又ハ家督相續人カ詐欺
ニ因リテ隱居ノ届出ヲ為シタルコトヲ知
リ又ハ隱居ノ届出ヲ為スコトニ強要セラ

レタルモ既ニ此強迫ノ状態ヲ免レテ隨意
ニ隱居ノ取消ヲ請求スルコトヲ得ル状態
ヲ復シタルニ拘ハラズ敢テ其取消ヲ請求
セサルニ於テハ假令多少ノ利害關係ヲ有
スル親族又ハ公私ノ利益ヲ保護スル檢事
タリトモ他ヨリ隱居ノ取消ヲ請求シテ却

法典調査會

テ當事者ノ意思ニ反スル結果ヲ生セシム
ヘキニ非ス故ニ既成法典ノ如ク任意ニ出
テサル隱居ニ付キ本人カ別ニ故障ノ申立
ヲ為ササルニ拘ハラズ親族又ハ檢事ヨリ
隨意ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得セシムル
ハ徃々本人ノ意思ニ反シ濫リニ私事ニ干

洗セシムル弊ヲ免レサルモノニシテ要ス
ルニ隱居ヲ為スニ付キ最モ利害關係ヲ有
スル者ハ本入及ヒ其家督相續人ナレハ此
等ノ者ヲ別ニ任意ニ出テサル隱居ノ取消
ヲ請求セサル限リハ他ヨリ之ヲ取消サシ
ムル必要ナカルヘシ只隱居者又ハ家督相
續人カ隱居ノ届出ハ詐欺ニ因リテ之ヲ為
サシメラレタルコトヲ知ラス又ハ隱居ノ
届出ヲ為スコトニ強要セラレタル強迫ノ
状態カ尚ホ存續スル間ハ親族又ハ檢事ヲ
シテ隱居ノ取消ヲ請求スルコトヲ得セシ
ムルハ當事者ノ利益ノ為メ其他公私ノ利

蓋ノ為メ其必要アルモノナレハ本條第二
項ハ即チ隱居者又ハ家督相續人カ詐欺ヲ
發見セス又ハ強迫ヲ免レサル間ハ其親族
又ハ檢事ヨリ隱居ノ取消ヲ請求スルコト
ヲ得ルモノト為セリ加之假令親族又ハ檢
事カ右ノ場合ニ於テ隱居ノ取消ヲ請求ス
ルモ隱居者又ハ家督相續人カ其任意ニ出
テサル隱居ヲ追認スルトキハ他ヨリ強ヒ
テ隱居ヲ取消サシムヘキ理由ナク寧ロ當
事者ノ意思ニ從ハシメサルヘカラサルニ
因リ本條第二項ハ特ニ但書ノ規定ヲ設ケ
隱居者又ハ檢事ノ隱居取消權ハ消滅スヘ

キ旨ヲ明カニセリ

其他隱居ノ取消ハ戶主權ノ所在ヲ變更セ
シメ種々ノ法律關係ニ重大ナル關係ヲ有
スルモノナレハ隱居ノ届出ニ付キ如何ナ
ル事情ノ存セルニ拘ハラズ右ノ取消權ヲ
シテ永ク存立セシムルコトハ法律上ノ實

法典調査會

際ニ於テ其當ヲ得タルモノニ非ス是レ即
チ本條第三項ハ隱居ノ取消權ノ消滅ニ付
十特別時效ヲ定ムル所以ニシテ隱居届出
ノ日ヨリ十年内ニ非サレハ隱居ノ取消ヲ
請求スルコトヲ得サルモノト為セリ

第七百五十九條

隱居ノ取消前ニ家督相續人

ノ債權者ト爲リタル者ハ其取消ニ因リテ戶

主タル者ニ對シテ辨濟ノ請求ヲ爲スコトヲ

得但家督相續人ニ對スル請求ヲ妨ケス

債權者カ債權取得ノ當時隱居取消ノ原因ノ

存スルコトヲ知りタルトキハ家督相續人ニ

對シテノ辨濟ノ請求ヲ爲スコトヲ得家督

相續人カ家督相續前ヨリ負擔セル債務及ヒ

其一身ニ專屬スル債務ニ付キ亦同シ

(參照) 取三〇九二項 十五年五月四日 福島縣

同 十九年大審院判決 金井善江對竹山 梅七

郎 二十五年二月十六日大審院判決

法典調査會

(理由) 隱居ヲ爲シ又ハ之ヲ取消スコトハ隱

居者ノ債權者又ハ家督相續人ノ債權者ニ

對シテ重要ナル利害關係ヲ有スルニ拘ハラ

ス既成法典ハ此等債權者ノ利益ヲ保護ス

ルニ付キ別ニ規定ヲ設ケサルハ其不備缺

點ト云ハサルヘカラス故ニ本案ハ先ツ隱

居ノ取消ニ關スル規定ニ連續シテ本條ノ
規定ヲ設ケ隱居取消ノ場合ニ於ケル債權
者ノ利益ヲ保護スルモノトス

隱居取消以前ニ一旦家督相續人ト為リタ
ル者ハ即チ其當時ノ戸主ニシテ此者ニ對
シテ債權ヲ取得スル者アルヘキハ更ニ言

法典調査會

フヲ俟タサル一存ナリ而シテ此等ノ債權者
ハ通常其相手方カ戸主タル身分ヲ有スル
コトニ重キヲ置クモノナレハ一朝隱居ノ
取消ニ因リテ隱居者カ再ヒ戸主ニ復シ右
ノ相手方カ戸主タル身分ヲ失ヒテ推定家
督相續人タル位置ニ復シタル場合ニ於テ

前ニ戸主タル身分ヲ有セシ家督相續人ニ
對シテ權利ヲ取得シタル債權者カ隱居ノ
取消ニ因リテ戸主ト爲リタル者ニ對シ其
權利ヲ行フコトヲ得サルニ於テハ往々不
慮ノ損害ヲ被ムルコトアルハ敢テ辯明ヲ
要セサルヘシ故ニ隱居取消ノ場合ニ於テ
債權者ノ利益ヲ保護シ取引ノ安全ヲ保タ
ントスルニハ隱居ノ取消以前ニ家督相續
人即チ其當時ノ戸主タル者ノ債權者ト爲
リタル者ヲシテ隱居ノ取消ニ因リテ戸主
ニ復シタル者ニ對シテモ辯済ノ請求ヲ爲
スコトヲ得セシムルノ外ナキヲ以テ本條

第一項ハ此趣旨ヲ明示セリ然レトモ若シ
此規定ノミヲ掲クルニ止ムルトキハ債權
者ハ尔後家督相續人ニ對シテ其權利ヲ行
フコトヲ得サルカノ疑ヲ生セシムヘキヲ
以テ本條第一項ハ特ニ但書ノ規定ヲ設ケ
債權者ハ家督相續人ニ對シテモ辨濟ヲ請

法典調査會

求スル權利ヲ失ハサルヘキ旨ヲ明カニシ
之ニ依リテ債權者ノ利益ヲ充分ニ保護セ
ンコトヲ期セリ然レトモ債權者カ其債權
ヲ取得セル當時隱居ノ取消原因ノ存スル
コトヲ知りタルトキハ家督相續人ノ戸主
タル身分ニ重キヲ置カスニテ却テ家督相

續人ノ一身上ニ着眼之後日隱居ノ取消カ
行ハルルモ自己ノ利害ニ關係ヲ有セサル
コトヲ豫期セルモノト云ハサルヘカラサ
ルニ因リ斯ノ如キ債權者ニ對シテハ本條
第一項ニ掲グル所ノ特別保護ヲ與フル必
要アルコトナレ故ニ本條第二項ハ債權取
得ノ當時隱居ノ取消原因ノ存スルコトヲ
知リタル債權者ハ家督相續人ニ對シテノ
之辨濟ノ請求ヲ為スコトヲ得ルモノトシ
之ニ依リテ法律保護ノ適度ヲ保タシメタ
リ其他本項末段ニ規定スル所ノ家督相續
人カ相續前ヨリ負擔セル債務及ヒ其一身

ニ專屬スル債務ニ付テハ其債權者ハ亦家
督相續人ニ對テノ之辨濟ノ請求ヲ為スコ
トヲ得ルニ止マルヘキハ別ニ說明ヲ要セ
サルヘシ

第七百六十條 隱居又ハ入夫婚姻ニ因ル戸主
權ノ喪失ハ前戸主又ハ家督相續人ヨリ前戸
主ノ債權者及ヒ債務者ニ其通知ヲ為スニ非
サレハ之ヲ以テ其債權者及ヒ債務者ニ對抗
スルコトヲ得ス

(理由) 戸主カ隱居ヲ為スコトハ此者ノ債權
者及ヒ債務者ニ種々ノ利害關係ヲ及ホス
コト更ニ言フヲ毋セサル所ナレハ假令隱

法典調査會

居ノ效力ハ其届出ニ因リテ既ニ發生シタ
ルモ未タ隱居ノ事實ヲ知ラサル債權者又
ハ債務者ニ對シテ其效力ヲ主張スルコト
ヲ得セシムルニ於テハ此等ノ者ヲシテ往
々不慮ノ損害ヲ蒙ラシメ法律保護ノ不完
全ナル譏ヲ免レサルヘシ然レトモ隱居ハ

必ス之ヲ隱居者ノ債權者又ハ債務者ニ通
知スルコトヲ要ストシ又ハ必ス公示ノ方
法ヲ盡ササルヘカラスト為スカ如キハ頗
ル煩雜不便ニシテ實際ノ事情ニ適セサル
ヘシト雖モ既成法典ノ如ク此等保護ノ方
法ニ付キ別ニ何等ノ規定ヲ設ケサルハ其

法典調査會

缺點ト云ハサルヘカラスト故ニ本案ハ法律
保護ノ必要ト實際ノ事情トヲ斟酌シテ特
ニ本條ノ規定ヲ設ケ隱居者又ハ家督相續
人ヨリ隱居者ノ債權者及ヒ債務者ニ隱居
ノ通知ヲ為スニ非サレハ此等ノ者ニ對シ
テ隱居ノ效力ヲ主張スルコトヲ得サルモ

ノトシ之ニ依リテ殊更ニ通知ノ義務ヲ負
ハシメサルモ自ラ通知ヲ為スコトヲ怠タ
ラサラシムルト同時ニ債權者及ヒ債務者
ノ利益ヲ適當ニ保護センコトヲ期セリ

第七百六十一條 新ニ家ヲ立テタル者ハ其家ヲ廢シテ他家ニ入ルコトヲ得

家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ其家ヲ廢スルコトヲ得ス但本家ノ相續又ハ再興其他正當ノ事由ニ因リ裁判所ノ許可ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

(參照) 人二五二八年九月二十九日内務省指令、九年告七五號、十年太政官達六〇號、十二年二月八日内務省指令、十四年七月二十日同省同定、十七年四月一日同省指令、二十四年五月司法省指令、同年十月同省指令、二十五年一月同省同答、二十六年一月同省指令、同年九月同省指令

法典調査會

(理由) 本條及ヒ次條ハ戸主權喪失ノ一原因

タル廢家ニ関スル規定ヲ掲クルモノニシテ就中本條ハ廢家ヲ爲スコトヲ得ルモノヲ指定シ家ヲ重ニスル立法ノ本旨ヲ全カシムルモノトス蓋シ祖先ヨリ繼承シタル家ヲ廢スルコトハ極メテ重大ナル事件

ニシテ我邦古來ノ慣習ニ依ルモ祖先ノ祭ヲ絶テ其家ヲ廢スルハ容易ニ之ヲ許スヘカラスルコトハ別ニ聲明ヲ要セサル所ナリ然ト雖モ新ニ一家ヲ立テタル場合ニ於テハ假令戶主カ之ヲ廢シテ他家ノ家族ト為ルモ之レカ為メニ祖先ノ祭ヲ絶ワモノニ非サルヲ以テ之ヲ許スモ敢テ家ヲ重シスル立法ノ本旨ニ悖ルニ至ラス及之一旦新立シタル家ハ必ス之ヲ維持スルコトヲ要ストセハ往々困難ナル事情ノ存スルアリテ實際ニ適セサル結果ヲ生スルコトナシトセス故ニ本條第一項ハ新ニ家ヲ立

テタル者ニ限り其家ヲ廢シテ他家ニ入ル
コトヲ得ルモノトシ以テ實際ノ事情ニ適
セシメタリト雖モ家督相續ニ因リテ戸主
ト爲リタル者ハ既ニ説明セシ所ノ理由ニ
因リ決シテ此例ニ從ハシムヘキニ非サル
ヲ以テ本條第二項ハ既成法典人事編第二

法典調査會

百五十一條ノ如ク家督相續ニ因リテ戸主
ト爲リタル者ハ其家ヲ廢スルコトヲ得サ
ル旨ヲ明カニセリ只既成法典ハ此通則ニ
對スル例外トシテ本家相續其他正當ノ事
由アル場合ニハ廢家スルコトヲ得ヘキ旨
ヲ規定スト雖モ本家再興ノ場合ニ於テモ

己々コトヲ得サルトキハ分家ノ戸主ヲシ
テ其分家ヲ廢セシムル至當ノ理由アルニ
因リ本條ハ本條第二項但書ニ於テ此趣旨
ヲモ明白ナラシメ且裁判所ノ許可ヲ必要
トシテ濫リニ廢家ヲ為スノ弊ヲ防カンコ
トヲ期セリ

第七百六十二條

戸主カ適法ニ廢家シテ他家

ニ入りタルトキハ其家族モ亦其家ニ入ル

(参照) 人二五三、十四年七月二十日內務省伺

定、十七年四月一日同省指令

(理由)

本條ハ戸主カ適法ニ廢家シタルニ因

リ其家族ニ及ホス戸籍上ノ效果ヲ規定ス

ルモノニシテ既成迄典人事編第二百五十

三條ノ字句ニ修正ヲ加ヘタルニ過キス

第七百六十三條 戸主ヲ失ヒタル家ニ家督相
續人ナキトキハ絶家シタルモノトシ其家族
ハ各一家ヲ創立ス但子ハ父ニ隨ヒ又父ノ知
ルサルトキ他家ニ在ルトキ若クハ死亡シタ
ルトキハ母ニ隨ヒテ其家ニ入ル
前項ノ規定ハ第七百四十五條ノ適用ヲ妨ケ
ス

(参照) 入二六一十三年告三號十五年八月十
一日内務省指令十七年告二〇號

(理由) 本條ハ戸主ノ死亡又ハ國籍喪失ニ因

リテ一家ノ断絶スル場合ニ関スル規定ニ
シテ或ハ戸主權ノ喪失ニ関スル本節中ニ
之ヲ掲クルハ其當ヲ得サルニ似タリト雖
モ他ニ適當ノ場所ナキヲ以テ廢家ニ関ス
ル規定ニ連續シテ之ヲ掲ケタリ而シテ本
條ノ趣旨ハ既成法典人事編第二百六十一

條ト臺モ異ナル所ナキヲ以テ別ニ說明ヲ
要セスト雖モ既成法典ノ如ク本條ノ場合
ニ於テ家族ハ總テ一家ヲ創立スト云フニ
止マルトキハ家族ニシテ他ノ者ノ子タル
者モ其父又ハ母ノ家ニ入ラスシテ別ニ一
家ヲ創立シ家族ニシテ妻タル者モ其夫ノ

法典調査會

家ニ入ラスシテ別ニ一家ヲ創立スルコト
ヲ要スルカノ如ク解セシムルハ當然ノ結
果タルニ因リ本案ハ特ニ本條第一項但書
ノ規定ヲ設ケ家族ニシテ他ノ者ノ子タル
者ハ其父ニ隨ヒ又父ノ知レサルトキ他家
ニ在ルトキ若クハ死亡シタルトキハ母ニ

隨ヒテ其家ニ入ルヘキ旨ヲ明カニシ又本
條第二項ノ規定ニ依リ戸主ノ家族ニシテ
夫タル者カ一家ヲ創立シタルトキハ妻ハ
之ニ隨ヒテ其家ニ入ルヘキ旨ヲ明ニセリ